九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近代中国・新文化運動期における優生概念 : 潘光旦「中国之優生問題」を中心に

閻, 俊
東京大学大学院総合文化研究科修士課程

https://doi.org/10.15017/16021

出版情報：Comparatio. 6, pp.12-20, 2002-05-20. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

近代中国・新文化運動期における優生概念
——潘光旦「中国之優生問題」を中心に——

閻 俊(Yan, Jun)

1．始めに

19 世紀後半から、西洋の列強及び日本から多大な影響を受けて、中国は近代国民国家の道を歩みはじめた。その問題についてはポスト・コロニアリズムの理論を通しての考察によって既に多くの成果があげられてきた。ただ、この場合、中国の近代化が如何に西洋、及び西洋を学んだ日本から影響を受けたかを、多くの具体例で証明するということだけではどうしても足りなく、西洋のものが、中国に入った時、何と戦ってそしてどのようにその意味を構成していくか等の問題点も極めて大事で看過してはならないと思う。そのような問題点に対する考察を試みるのが、小論の基本的な出発点である[1]。

小論がこれから扱おうとする近代的擬似科学としての優生学は、19 世紀末から進化論の影響下にあって中国の知識人達の関心を集めはじめたものである[2]。そして、主に日本経由で入ったその優生思想は、「保種」、「保国」のための社会変革をめざして社会進化論的かつその裏返しの退化論的なコンテクストで受容されはじめていた頃、また人種論、欧化主義（人種の欧化）、文明論と——それもまた主に日本経由で——結びついていたことが指摘されている[3]。

そして、五四新文化運動期に入ってから、優生学は初段階ではやはり日本経由で、あらためてその言説上の位置を築くことになり、国民国家の文化創造に参与したと指摘されているが[4]、その時期の優生概念が、五四倫理革命、社会変革のディスコースのなかで、一体どのような意味をもっていたのか、もっと掘り下げて考える必要があると感じる。何故ならば、同じ優生概念が、その時期の幾つかの文脈においてかなり違う（むしろ対極的な）意味に繋げられたことが以下の分析で分かるのである。以下は、その時期のもっとも典型的な具体例——アメリカで生物学・遺伝学・優生学を学問として専攻し、優生学を本格的に中国に導入したと言われた潘光旦によって書かれた「中国之優生問題」（『東方

---

[1] それについて問題提起し、そして考察の実践を行ったものに、例えば Lydia H. Liu. *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity— China, 1900-1937.* California: Stanford University Press, 1995. がある。その中では、言語横断的実践(Translingual Practice) という方法的概念が提出され、従来の西洋の衝撃とそれによる内部変革というおきまりの分析方法をとらず、「翻訳された近代」が中国で（1900-1937 年の時期において）どのようにその意味を構成していくかを明らかにすることが試みられたのである。小論の出発は、その方法論から受けたヒントが大きい。

[2] 優生学 eugenics は、イギリスの遺伝学者で植民地探検家でもあったフランシス・ゴールトンが従兄弟のチャールズ・ダーウィンの進化論からも啓発されてギリシャ語から創った（1883 年）ことばであることは知られている。それ以来、欧米の各地での思潮に優生学が影をおとすことになった。

尚、優生学の概念が中国に入った時、「優生学」、「善種学」、「淑種学」又は「婚姻哲嗣学」、「哲嗣学」、「人種改良学」等幾つかの言葉に翻訳されたことは、たとえば潘光旦「優生概論」（『留美学生季報』第 11 巻 4 号　1924 年 12 月、本稿では『民国叢書』第一編 20（上海書店による、商務印書館 1947 年版の影印）の収録〔4 頁〕を参照）において言及されている。

[3] 坂元ひろ子「恋愛神聖と民族改良の『科学』——五四新文化ディスコースとしての優生思想——」（『思想』894 号　1998 年 12 月）を参照。

[4] 坂元ひろ子による前掲論文を参照。

雑誌』21巻22号、1924年)[5]に対する分析を基軸に、それと他の同時期の具体例との比較を行いたい。そのような作業によって、当時優生概念の意味における闘いを考察することができ、引いては、優生概念が参与した、所謂新文化運動期に於ける国民国家の文化創造の経験に対する理解を深めることができると信じる。

2.「中国之優生問題」をめぐって

「中国之優生問題」は、アメリカで優生学を勉強中の潘光旦がアメリカの優生記録館で書いたもので、その前の年には既に「合衆国絶育之現状」(『申報』星期増刊　1923年10月21日)という、アメリカの「民族における不適分子」に対する断種に及ぶ優生学の歴史と現状を報告した文書を書き、そして「中国之優生問題」と同じ年に「優生概論」(『留美学生季報』第11巻4号　1924年12月)を書き、それらを一つの出発点として、以後優生問題に関する多くの論文を書きつづけていた。この「中国之優生問題」は、潘光旦の方から、同じく優生問題に関心を持ち、1920年代の初頭から『東方雑誌』、『婦女雑誌』等に優生学に関する多くの文章を書いた周建人にコメントを求めることを発端としてちょっとした論争を起こしたのである。生物学・遺伝学・優生学を専攻とする科学者潘光旦は、周建人の反論に対して、その「学術厳密さ」に欠ける論法を指摘する[6]が、「学術厳密さ」に基づく潘光旦の、優生学を見る視点とはどういうものなのかは興味深いところである。次は、「中国之優生問題」に焦点を当て、その点を考えていきたい。

「中国之優生問題」は、まず優生学ではなく所謂「西化東漸」(つまり西洋の文化が東洋に広がりつつある現象)の問題を論じることから始まる。潘光旦は次のように言う。西洋の文化が東洋に広がる前と広がった後とでは、中国の社会は完全に変わった。観念が変わったため、一切の社会信仰、社会組織も、その影響を受けないものはない。そのような影響は、はたして利益になるところが多いか、弊害になるところが多いか。数十年以来、我が国の人達は、(西洋の文化)に追いつこうと一所懸命だが、(以上の問題を)顧みる余裕はなかった。いつも懐疑的な態度で傍観する人も少なくないが、その中の多くは固定観念を抱く前世代の人達で、一切を国粋論で考えているため、その懐疑的な態度が偏見となり、その発言は今の時代の言論においては殆ど重視されず、急進的な青年達には、考え直させる力を持たないばかりか、急進的な考え、旧いものを恨む気持ちをかえって倍増させることになる。しかし、西洋の文化は完璧とは言えず、また或いはその良いところは全部中国の土壌に移植できるとは限らない。

続いて潘光旦は、今まで西洋文化の導入にあたって取られた、(西洋文化の善悪を判断する)幾つかの基準について論じる。潘光旦の分析によると、国粋派は、「土貨」(つまり中国のもの)と「洋貨」(つまり、西洋のもの)が似ていれば、「洋貨」を受け入れるが、まったく違う場合は「洋貨」を受け入れない。万の一、「土貨」と違う「洋貨」が、旨く入って社会に歓迎されたら、その「洋貨」は実際には「土貨」とは変わらないのだと旨く言い繕う。そのような基準は、今はもう時代遅れであり、取るにたりないものである。もう一つの基準は、二つの時期に分けることができる。第一時期では、負けてからの焦る気持ちで、西洋文化の要素の中で発展性があり、力強いものであれば、そのシステム全体を鵜呑みして搬入し、その背景にある観念・信仰については関心がなかった。第二時期では、そ

---

[5] 「中国之優生問題」は、また1928年に「西化東漸及中国之優生問題」と改題のうえ、「優生概論」等とともに新月書店出版の単行本『人文生物学論叢』に収録。

[6] 潘光旦「読『読「中国之優生問題」』——答周建人先生」(『優生概論』　1928年)、本稿では『民国叢書』第一編20(上海書店による、商務印書館1947年版の影印)の収録を参照。

のような鵜呑みは消化できないと分かり、分解して咀嚼するために、システム全体ではなく、その観念を取り入れるようになった。政治観念が変革されたため、今までの十年間の革命があり、社会観念・知識観念が変革されたため、ここ三、四年来の新思潮運動があった。しかし、両方とも西洋文化の要素を取り入れるに当たっては、(社会の)環境に対する改造力を基準とするところでは終始一貫であると。

続いて潘光旦がこう言う。優生学者の観点から見ると（社会）環境の改造と種族の生存競争とは、それぞれ別なことであり、両者は関係があるが一つに混同してはならないと。

潘光旦の以上の問題意識に興味深いところがある。優生学という「科学」の立場で種族の生存競争を考える場合、必ずしも社会の改造を考える必要はないというのが、彼の言いたいところであろう。社会の改造と「科学」の結合という、新文化運動期以来、高く掲げられてきた理念[7]が、ここでクェスチョン・マークが付けられたのである（それに関しては後でまたその更なる展開について論じる）。

次は、潘光旦が「西化東漸」前の中国の「優生状況」について論じた以下の要点を挙げる。

- 人間の生存は進化の過程内にあるものの、文明化以来、「天択」＝自然淘汰だけでなく、「化択」＝文化的もしくは社会的選択が、人間の種族の生存に影響を及ぼすようになり、文化が進めば進むほど「化択」が支配的になって「天択」は減少する。「天択」と「化択」は一つの物でないばかりか、しばしばお互いに相反するものとなる。例えば、人間の場合、血統の良い人でも個人的な好悪で独身とか無子を志向することがあるため、必ずしも適者生存とはならない。それが種族滅亡の原因になることもある。中国の場合は、西洋と違って、中国から帰った西洋の生物学者・進化論者達も言ったように、まだ「天択」の機能が大きく働いている。それは、中国に於ける病弱者の死亡率（特にその幼児の死亡率）等からも分かる。
- 個人の発展という立場から見る場合、家族主義を批判しないものは殆どいないが、種族の生存競争という立場に立って見れば、必ずしも悪いことにはならない。「不孝有三，無後為大」（不孝行には三つあるが、その中でも後継ぎがいないことが一番大きい不孝行だ）という戒めは、二千年来、人の子となる者達を十分に苦しめたが、種族が長く存続することが、大きくそれによって保障された。また、「女子無才便是徳」（女子は無才が徳）は、今の女性の立場に立つ人達から厳しい批判を浴びる旧い教訓だが、（女性が）知的生活に参与しないため、家庭を築くことに全力を注ぐことができ、子供に発育の地盤を与えることができたという点においては、種族全体に対する功徳がないとは言えない。個人主義が発達しなかったため、どうしても事情のある場合を除いては、独身せず離婚せず出家しない。そのような諸観念が人々の心に深く根ざしたため、個人の身は自由でないが、宗族の流れは絶えることはない。西洋では義務を言う人は必ず人権も言う。両者の一方があれば必ず他方もあると信じる。しかし、従来の中国社会の生存を考察すると、この説は必ずしも正しいとは言えない。家族主義の訓練を受けた結果、義務或いは責任の観念は誰にもあるが、権利の観念は薄くて弱い。このような生活の観念は、明らかに種族の存続には利点が多く弊害が少ない。厳密な生物学の観点から論を立てるなら、種族の生存競争を優先すれば、個人の自由・幸福は当然のことながら譲歩しなければならない、或いは完全に犠牲にならなければならない。
- 潘光旦はまた、中国に於ける幾つかの社会構造――婚姻、出産、国による人材の選抜制度である科挙制度、農業本位の生活等について詳しく検討する。結論をまとめてみると、それらの、中国

---

[7] それに関しては例えば周程「陳独秀における『民主』と『科学』 ――五四新文化運動期を中心に――」（『思想』905 号　1999 年 11 月 ）において、陳独秀という人物のケース・スタディを中心に、五四新文化ディスコースにおける「民主」と「科学」の結合という理念について詳しく検討される。

の伝統的な社会構造は、西洋の今のそれと比べると優生学的だと言える。たとえば中国の伝統社会においては、婚姻の選択は家長が決めるのだが、個人の選択がロマンチックな恋愛に偏りがちで、相手が、家族を助け子を育てるのに適当かどうかを考慮しないのに比べると、家長の決定は、「門當戸対」（門第相当）を考慮し、優生学に合う。また、例えば科挙という人材選抜制度は、十年余り前の社会変革の際、学術不振の原因だと言われ、矛先が向けられたが、科挙制度で選ばれ、名誉と地位が与えられた優秀な人材は、その互いの家族に婚姻が結ばれることが多く、生まれる子孫も優秀な血統を保つことができた。史上の家譜の例からも分かるように、名門の一家族から状元、榜眼、探花（それぞれ科挙試験の第一、二、三名）が何世代にわたって多出する例が多い。

潘光旦による以上の論述は、要するに優生学という「科学」の立場から見るかぎり、五四新文化運動期以来、批判の矛先が向けられた中国の伝統文化――その中心は封建的な家族主義である――は種族の生存競争にとっては合理的なものであり否定できないという考え方を浮かび上がらせた。しかし、同じこの優生学は実はまた五四新文化運動期以来の家族主義批判、女性解放運動、恋愛神聖そして個人主義等の、倫理革命、社会変革のディスコースにも使われていたのである。次はそれらの文脈においての優生思想について整理してみたい。

3．周建人、瑟盧、周作人及びエロシェンコのテキストに現れた優生思想について

まずは、周建人による「恋愛結婚与将来的人種問題」（『婦女雑誌』8巻2号、1922年）[8]を取り上げたい。恋愛結婚と優生学との関連について論じたこの文章は、民族の改良という問題を一番始めに持ち出してから、善種学の創始者――英国の科学者ゴールトンの、不良者の生育のチャンスを減少させることによって劣等者の数を漸次に減少させ、社会を進歩させることができるという考えを紹介し、そして次のように続く：我々が知るべきなのは、自然界のものの進化には、元より「択種留良」（良い種を選択して残す）の作用があり、その作用は、即ち「両性の選択（Sex selection)」である。なぜなら愛の基礎は美と知恵であるからだ。しかし、人類は野蛮時代の略奪結婚では美と知恵よりは武力に頼り、後の社会では、経済及び各種の利益関係に詐欺・虚偽の手段も加えて、婚姻の成立を基準の無いものにした。それによって、自然界で淘汰されるべきものは、人間社会では繁殖のチャンスを得た、しかも、ピアソンの調査が示したように、不良者の繁殖が優良者の場合よりずっと早い。そこで、結婚の取締りという考えが段々出てきたが、大多数の善種学者は、社会制度で結婚を取り締まるのを完璧な方法だとは考えない。では完璧な方法はどういう方法であろう。

次はこう続く：善種学にあう婚姻は即ち恋愛結婚である。（それとは反対に）社会風俗習慣の不良は配偶者の選択の基準を誤らせる。生物の両性の配合にはもともとある種の選択作用が働いており、しかもその選択基準はもともと向上的で、美・知恵・健康を中心とした方向にむかうものである。

文章は最後にチャールズ・ダーウィンの息子でイギリス優生教育協会会長のレナード・ダーウィンの「恋愛結婚こそが自然な善種法である」という主張を引用して終わる。

周建人のこうした主張は当時にあっては突飛なものではなかった。この文章の直後に同じ雑誌において翻訳紹介される賀川豊彦の恋愛論もエリスの「結局、恋愛だけが、人種改良の最善の実験を発見できる」という主張に同感して、次のような結論を見せる、「われわれも恋愛こそが人間を改造する唯一の道具であると信じる」[9]、と。

---

[8] 本稿では、『民国叢書』第一編18の「中国婦女問題討論集（下）」（上海書店による、新文化書社1923年版の影印）の収録を使用。

[9] 賀川豊彦著、Y・D（李栄第）訳「恋愛之力」（『婦女雑誌』8巻9号、1922年）。本稿では、『民国叢書』

またエレン・ケイの恋愛至上主義に賛同を与え、近代的恋愛の教科書ともされた厨川白村の「近代の恋愛観」が呉覚農によって翻訳されて『婦女雑誌』(8巻2号)に掲載されたのも1922年であった[10]。そのなかでも恋愛なき結婚は民族の発達・人類の進化の障害となると指摘されていたのである。

ここでは、優生学という「科学」は、五四倫理革命における「恋愛神聖」のディスコースに反対するものではなく、それとうまく協調したことが分かる。

また、周建人は「恋愛結婚与将来的人種問題」において、民族の改良という問題を一番先に掲げ、それを最終の目的としているが、それも当時の倫理革命、社会変革のディスコースにおいては一つの典型的な考え方であったと言えよう。しかし一方、国家・民族の改良よりは、もっと個人特に女性の自由・解放・幸福に関心を持つような考え方も決して無視できない存在であった。小論は次のところでそれについて少し考察してみたい。

まずは、瑟盧による「産児制限與中國」(『婦女雑誌』8巻6号、1922年)[11]を見る。優生学の観点から、産児制限の必要性を論じて、女性解放を唱えるこの文章は、次の幾つかの題目に分けて論を展開する。

- 出産率と文化レベル。ここでは、「高出産率と高死亡率、低出産率と低死亡率は、往々にして一つの社会で現れる。前者はだいたい文化レベルの低い社会、後者はだいたい文化レベルの高い社会」というエリスの言葉を援用しつつ、中国における高出産率と高死亡率の情況を、幾つかの統計数字そして一夫多妻、早婚の習慣、「不孝有三無後為大」、「五世同堂」、「多福多男」等の観念、不衛生と医薬の遅れ等から推論する。
- マルサス主義と新マルサス主義。マルサスの考えでは、晩婚、独身、節欲等人間によるコントロール以外には、飢饉、戦争、病気等自然による人口制限が働く。我が国は、早婚、一夫多妻の風習があり、それはマルサスの言う人間によるコントロールに相反するものである。従って、彼が言うところの、自然による人口制限は近年の現実となっている。

  しかし、マルサスの言う人間によるコントロールは、完全に実行するのは難しく、売春、ストレス、犯罪、病気を招くから、新マルサス主義はそれを修正し、ある程度の早婚を許し、受胎を予防して多く生むことを防ぎ、それで両性間の潔白、家庭の快楽、個人の幸福、社会の健全が保障されると考える。米国のサンガー夫人が言った「産児制度」は、この新マルサス主義から出発したものであり、中国の文化レベルを高め、今の飢饉、戦争、病気等の苦痛を救済するのにどうしても必要であり、そして女性解放の前途とは、更なる重大な関係がある。
- 中国における従来の産児制限。偽道徳を崇める中国では、この「産児制限」という言葉を聞くと非常に怖がるが、中国において、堕胎、嬰児遺棄または殺害のような悲惨なことは、従来からあった。もっともそのようなことの流行は、完全に不道徳によるものではなく、経済の圧迫、女性が自由を求める願望もその一部の原因となり、経済の圧迫を取り除き、女性が自由を求める願望を満足させないと、そのような悲惨事は絶えることはない。産児制限は科学的な方法で、母なるものが子を生む数を自由に決められるようにし、堕胎、嬰児遺棄または殺害のような残酷で非人道的な手段を避け、飢饉、戦争、病気等の苦痛、売春、ストレス、犯罪、病気等の弊害を防ぐ。だから、産児制限は不道徳どころか、極めて道徳的である。
- 産児制限と貞操論。産児制限が行われると貞操が危なくなると心配する人がいるが、我が国では

第一編18の「中国婦女問題討論集(下)」(上海書店による、新文化書社1923年版の影印)の収録を参照。

[10] 本稿では、坂元ひろ子による前掲論文での指摘〔20頁〕を参照。

[11] 本稿では、『民国叢書』第一編18の「中国婦女問題討論集(上)」(上海書店による、新文化書社1923年版の影印)の収録を使用。

貞操と言えば女性だけのことで、男性とは全く関係ない。しかし、貞操は男女ともに守るべきことで、性教育の実施、恋愛神聖の提唱、女子の人格を尊重することなどこそが、貞操を守る為の一番大切なことである。

- 産児制限と民族主義。産児制限に反対する、理論上でわりと強いものは、民族主義者の主張である。彼らの考えでは産児制限を実施すれば、人口が減少し、種族・国家が衰退すると。彼らはよく古代ローマの例を出す。今は国家主義から国際主義へと変革する時代であり、その種の議論は存在の価値があるかどうか、それについては我々は取りあえずは言わないことにするが、たとえ種族の強盛という立場から言っても量よりは質であり、それは英仏諸強国との比較でも分かることである。しかも、高い出産率に伴う高い死亡率で、人口の増加もできず、それに飢饉、戦争、病気等の弊害を生じさせる。我々は人種改良学の理論に従って、産児制限を実行し、更に衛生を注意し医薬を改良すれば、民族の質がよくなり、人口も必ずしも減少しないだろう。それに我々は今ちょうど戦争に反対し平和を求めている時であり、もとより人口の増加を望んでいない。
- 女性の自由と産児制限。中国の女性は、男性そして他の国の女性が教育を受ける一番大切な年齢に当たって、既に独断な父母の命令で、彼女が会ったことのない、愛情のない男性と結婚し、母親の義務を負わされる。一生続けて妊娠、分娩、哺乳、衣食等の仕事に負わされ、また病気の悩み、夭折の悲哀等で、体の苦労だけでなく、精神面のいろいろな苦痛にも苛まれる。このように一生苦労な生活をしては、子供を生む機械となり、教育を受けるチャンス、社会にサービスする余裕、経済的に独立すること等できるものか。したがって、完全な女性解放を求めようとするなら、社会における待遇の平等、恋愛及び結婚の自由等を求めると同時に、女性の母性の選択権も求めなければならない。でないと、女性は結局男性の奴隷になることが避けられない。
- 結論。産児制限は、女性の解放、種族の改良、文化レベルの向上を図り、飢饉、戦争、病気等の弊害、堕胎、嬰児遺棄または殺害のような罪悪を取り除き、戦争を無くし、社会を改造する等にもっとも有利かつ必要なことである。種を残すことは、人類と一切の動物が持つ固有の本能であり、そして人間には更に自己の繁殖力を支配する自由を要求する願望がある。それは人類と他の動物との違うところである。野蛮の人類においては堕胎、嬰児遺棄または殺害等でその種の願望を満足させたが、文明の人類においては科学的妊娠予防法がそのような悪劣な手段に取って代わった。そのような交替の発明は、文明人と野蛮人の違うところである。

優生学の理論に基づく産児制限を説く瑟盧の論においては、国家・民族の改良よりは、人類特に女性の幸福・自由・解放にもっと関心が寄せられていることは明らかである。それと似ているような立場は、周作人の文章からも見られる、次は周作人による「婦女運動与常識」[12]という文章を見る。

周作人の「婦女運動与常識」において取り上げられた、女性が身に付けなければならない自然科学・人文科学の常識に、進化論・遺伝論と善種学が（生物学がその枠組として）入る。何故それらの自然科学・人文科学の常識を身に付けなければならないかについて周作人は文章の始めにおいてこう言う。女性運動はどのように発生したのか。皆さんが知っているように、女性に人間及び女性という二重の自覚があったからこそ、この解放運動ができたのである。しかし中国はどうだろう、皆が人間として生きているが、自分が人間であるということは殆ど知らない、或いは自分が「万物の霊長」としての人間だと思って、自分がやはり生物だということを忘れている。このような社会においては、本当の自己解放運動はありえない。私は、個人は自分に対する認識があってこそ、初めて決意して人間に相応しい生活を追求することができると信じる。ギリシアの哲人 Thales の格言が言うには、「自己を知

---

[12] 文末の日付は 1923 年 1 月、後に周作人『談虎集』（上海北新書局　1928 年）に入る。本稿は周作人『談龍集・談虎集』（岳麓書社　1989 年）所収使用。

る」と。これは一番良い教えだと言える。私が主張する常識とは、即ち人々に「自己を知る」ようにさせるための道具である。まともな人間として生きるためには、（ケーキを作ること等以外にも）また多くのことを知るべきである。でないと、無意識に本能と習慣に任せて生きていくしかなく、充実な生活というものに対する願望が出てこないと。

周作人はこの文章を書く一カ月前に、ロシヤの盲詩人エロシェンコによる北京女子高等師範学校での講演を訳している[13]が、その中で女性がどのような母親になるべきかについて説くエロシェンコが次のように言う。他人がアレンジした偶然な結婚の後、女性は続く性生活の中で様々な困難に合い、子を孕むに至る。すると彼女は完全に戸惑ってしまう。それらのことについて彼女は全く知識を持たなく、牛欄にいる牛よりも、犬舎にいる犬よりも愚かで、子供が大きくなり、或いは子供の数が年に年に多くなってきて、益々困るようになる。衛生学が全く分からないため、自分の生理と心理も分からず、子供の生理と心理も分からない。そこで彼女は、一匹の、山林の暗闇に道迷いをした雌羊のように躓きながら走り回って絶望に鳴いて助けを求めと。女性が知識を身につけることによって健康な子を生育し、苦難から救われるというエロシェンコの発言は、その後間もなく書かれた周作人の「婦女運動与常識」にヒントを与えたことは十分に考えられる。

以上見てきたように、優生学という「科学」は、五四新文化運動期の倫理革命、社会変革における恋愛神聖、家族主義批判、女性解放運動、個人主義のディスコースに参与し、うまく共同作戦したのである。それが、潘光旦の論説においては、両者の間に大きな亀裂が生じ、優生学が、恋愛神聖、家族主義批判、女性解放運動、個人主義等の倫理革命、社会変革のディスコースに支持するどころか、それに反対し、家族主義など所謂中国の旧い伝統を守るためのものとなったのだから、周建人の激しい反論[14]を招いたのも無理はない。ただ、周建人においても、その亀裂の原因に完全に気付いたとは見えない。その反論においては、潘光旦が否定できないと言った家族主義に対して批判の矛先を向けたものの、優生学の観点から見れば、中国は一体どういう方法をとるべきかという、方法についての議論に止まっていたのである。

４．再び「中国之優生問題」に戻って

さて、潘光旦は、更に中国の「優生状況」の将来について論を進める。その主な論点を以下のようにまとめる。

・ 環境論について。環境論は、病気に共通する外因を重視する一方、患者独自の体質を重視しないという近代の医学の発達を発端とし、平民教育、平民参政、一般に渡る生活レベルの向上を図る為の物質的な基礎、そして宗教感情の氾濫等がその後に続く。それで今は、体気を考えない医療方法、資質を問わない教育制度、制限を加えない慈善事業等が現れてきたが、社会変革に従事する大多数の人達は、それを当然なことと思い、実効を未だ見ないのにその理論を大事に守る。西洋においてはそれらの理論が発展してまだ二、三百年しか立たない。進化論・遺伝論が知り渡ってから、その説（上記の環境論）を懐疑する人は日に増して増え、幸いにわが国の人もそれに気づいた。

---

[13] 北京女子高等師範学校におけるエロシェンコの講演を、周作人が『女子与其使命』という題名で訳した文章である。1922 年 12 月 11 日の「晨報副刊」に掲載。

[14] 見仁（周建人）『読中国之優生問題』（『東方雑誌』第 22 巻第 8 号　1925 年）を参照。尚、周建人はこの文章において社会主義の観点も取り入れているが、社会主義の観点については小論では、取りあえず扱わないことにする。

・ 個人主義と社会主義について。両者は元々対立する社会哲学問題であり、一つにしては行けないが、中国固有の家族単位主義に相反するという点では共通しており、ここでは一緒に論じても差し支えない。個人主義は、その極端のほうは、個人を神聖不可侵なものとし、社会及び種族に対する責任感は薄弱で、その行為が一時的には環境と衝突しなくても、社会は最終的には必ずその害を被る。何故ならば、個人の自由・幸福に対する欲望が強いため、家族子連れに拘束されたくなくなるのが自然な成り行きである。社会の弊害は、種が絶えるということよりも酷いものがあるか。社会主義の目的は社会全般の安全にあり、優生学と衝突しないかというと、そうはならない。社会主義の大前提は環境万能、人類均等であり、経済組織を変革すれば社会の弊害がなくなるという考えである。米国の生物学者 Vernon Kllogg が考察したソ連の例を見ると、ソ連では人間は誰でも同じという原則に基づくため、行政措置、官職配置は、誰でもどんなことでもやれるという曖昧模糊な仮定に依拠する。その施設は一時的に話題になり、社会変革の理想家に良い例を提供できたが、将来の患いはまだ消えていないかも知れない。
・ デモクラシーについて。一般の人々が見聞きするデモクラシーは、その依拠する原則は、社会主義のそれと同じであり、違うのは経路である。社会主義の場合、その経路は、経済であり、デモクラシーの場合、その経路は政治である。デモクラシーに対する批判も社会主義の場合と同じである。

潘光旦は、また「西化東漸」以後の、既に発生した、或いはこれから発生する社会組織の変化について論を展開する。

・ 医学・衛生。医学方法と衛生知識は、今後「天択」（＝自然淘汰）力を減少させる一番大きい武器になる。今までの死亡は、大体自然淘汰的であり、これからは体質の弱いものも、一時の養護のお陰で延命することができ、生存・生殖できるようになる。すると出産の数量も増え、結局社会全般の生活レベルに影響を及ぼすようになり、一方比較的に健康・優秀な者は、婚姻制限及び生育制限をしなければならなくなる。
・ 婚姻。婚姻の問題はここ三、四年の新思潮の中において一番面白い問題であった。それに寄せられた大衆の関心が大きいということは、喜ばしいことであり、欧米の言論界においてはこのような大規模での討論はありえない。しかし個人主義の色が濃すぎる。国内における個人主義の発展は度を過ぎる傾向にある。一方には自由恋愛が、もう一方には独身主義、良妻賢母を超越する等のような言論が、いたるところにあり、未だ完全に事実にはなっていないが、皆種族にとって不詳な兆しである。
・ 出産。一般に渡る西洋化の影響で、ここ二、三十年は国内の優秀な者の出産率は既に減少する様相を呈している。新マルサス主義が入ってから更にその減少が加速する。優生学者は、産児制限そのもの自体には反対しないが、今の宣伝方法及びそれが流行してからの西洋での結果は明らかに自然淘汰に相反するものである。
・ 農業本位生活の反対側にある都市化。都市化は西洋においては既に過去の事実であり、その種族にとっての功罪はこれから明らかにされる。ところが、中国においては今まさに発展の最中で衰えそうもない。商工業の発展に従って人口も流動し、浮浪者が多く、灰塵も多い。今後どうすれば浮浪者及び灰塵を減少できるか。それは、実業界の大問題だけでなく、中国の人口問題に関心を持つ人も考えなければならない問題であろう。

潘光旦が最後の結論の部分で言った次のことが興味深い。二、三百年来、世界の思潮には共通する錯誤傾向があった。西洋が昔それを始め、東洋はその後につく。進化論が発展してから、理論上においては至るところに応用されているが、それの、人類の実践での効用は、五、六十年間立った今でも、未だめどが立たない。原因は、それら若干の、進化論より早く現れた錯誤傾向にある。その一は恒常

を変化に従わせる傾向。その二は量で質を計る傾向、その三は個人でもって種族を規範する傾向。三者の源は実は一つであり、その最終的な根拠はやはり「人類中心」及び「物為人存」（物は人間の為に存在する）等という、身のほどを知らず、根拠の無い玄学である。しかし生物の遺伝は、その成り行きに従って有利に導こうとせず、人為的な環境に重点をおくと、必ず異なるものを同一性というものに無理矢理に従わせるようなことになる。人間が自分の意志で行った一回目の試験はもう既に堕落・失敗の兆しを見せ、それはどうして原因のないものであろうかと。

つまり、潘光旦にとっての「優生学」は進化論に基づく新しい「科学」で、これまでの西洋から始まった「錯誤」を見直す契機となるものである。

5．締め括り

以上の通り、「中国之優生問題」の大体の内容をまとめてみた。　潘光旦が進化論・遺伝論に基づく優生学の問題を、彼の考えた「科学」の立場で論じる時、その論説は、五四新文化運動期以来の恋愛神聖、家族主義批判、女性解放運動、個人主義等の倫理革命、社会変革のディスコースとはまったく反対の側に立っていたのが明らかなことである。

ナチスの優生学的政策を一つの極端かつ悲惨な例とする近代の優生学のことだが、中国におけるその受容について考えるとき、そのままの意味ばかりにとらわれると、中国の近代化の経験について見逃すことが多い。以上の考察を通して分かるように、人種論、欧化主義（人種の欧化）と結びついていた「保種」、「保国」のコンテクストで受容されはじめた優生学の概念は、しかし、五四新文化運動期に入ってからは、恋愛神聖、家族主義批判、女性解放運動、個人主義等の倫理革命、社会変革のディスコースとは、（いろいろな結び方に違いがあるにせよ）うまく結びつき、新たに意味構成していったのである。そして更に、現れた潘光旦の論説においては、この優生学は、家族主義という、所謂中国の古い伝統を弁護し、恋愛神聖、女性解放運動、個人主義等、西洋から伝わってきた近代の思想・観念に反対する側に立ってしまったのである。要するに、優生学の概念は、その前後の過程において言語横断的実践（Translingual　Practice）があり、それぞれの文脈で違う意味付けが行われ、違うものと戦っていたのである。

もう一つ分かったことは、社会の改造と「科学」の結合という、五四新文化運動期以来の理念が、潘光旦の論説における両者の対立によって挫折を経験したということであろう。

主な参考文献：

◎天笠啓祐　1996 年　『優生操作の悪夢――医療による生と死の支配』増補改定版、社会評論社
◎坂元ひろ子　1998 年　「恋愛神聖と民族改良の『科学』――五四新文化ディスコースとしての優生思想――」『思想』894 号、岩波書店
◎周程　1999 年　「陳独秀における『民主』と『科学』 ――五四新文化運動期を中心に――」『思想』905 号、岩波書店
◎張競　1995 年　『近代中国と「恋愛」の発見』岩波書店
◎ Lydia H. Liu, 1995, *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity—China, 1900-1937*, Stanford University Press, California